

創作

溫

泉

槽

安部 正孝

55

昨日、蒼空の下を九十九折、胸突八丁と足の先許り見て辿つて來た山道が細々と黄昏の中に雨脚に烟つて居るのを、ガラス越しに快く眺め乍ら、私は山の香を泌々楽しんで居た。湯槽は崖に臨んで設けられ、四つに各々獨立して仕切られ、一つ一つが至極家族向に出來て居る。が今は私一人の様な氣がする。外に湯を使ふ氣配もなかつたし、仄かに漂ふ湯煙に電燈の光がしつとり濡れて居る位で、この落着いた雰圍氣は一遍斯うと落着いたら何時迄も、朝になつても夜になつても此儘ではないかといふ様な氣がする。月が出てゐる。此月がこの湯槽に映つて呉れたら其儘繪になる。いや句になると思つたら月が映る迄此處に頑張る氣になつた。映るかも知れない。映らないかも知れぬ。兎に角、映る迄待つ積りだ。動くのは惜しい。骨の髄まで湯の暖みが泌み通つて終つた。此儘融けて終つても更に悔無い覺悟だ。向ふの杉は殖林か原始林か知らないが見事だ。あの梢に月を止らせたいと湯槽の方は何うでもよくなつた。斯ういふ人情では仕方がないとひよいと首を戻すと浮いたりやな、く。私は息を呑んだまゝ湯面に見惚れた。月は盛に湯氣を噴く。殘念乍ら私の頭では繪にも句にもならない。見て居る中に私は何だかこの月が憎らしくなつた。逃さない様に私はそつと湯から手を抜くとこの月に叩きつけた。月は粹けて水玉が散る。散つた粹片は可愛想にいびつになつて揺れる。

山に宿り湯槽の月を碎きけり

再び大きく吟み乍ら私は疲を感じた。と、不意打に隣に鋭く嬌聲が湧いた。「失敗つた」と私はきつとなる。さつと裾捌きの音が階段の方へ動いて白い素足が闇をかすめてとん／＼と二足、三足。後には碎けた雰圍氣が私の氣持と共に渦巻いて残る。何の事はない。碎かれたのは月に非ずして私の匂だつた。

○

昨夜の事があつてから何うも氣持がはつきりしない。朝膳に向つたが何を喰つたか一体飯を食べたのかそれさへもはつきりしない。お米さんが膳を下げに来て私の顔を見て意味あり氣に笑ふ。

「何うなさいました。ぼんやりなさつて、何ぞ面白い事でも御座んしたか。」

「うん」と生返事で答へる。

「お隣の女の方御存知?。」

と訊く。「隣の女?」「隣の女と言へは——だが何うしてそんな事を訊くんだ、何の關係もないぢやないか。第一、こゝへ来て女の泊客に會つたのは昨夜だ、それも足二本だ。」と言つて遣ると、

「え?何で御座います?」と妙な顔をする。

「隣に女の居るなんて知りもしない——さ。」と交す。

「然うで御座んすか。」

とお米さんは一寸黙る。今度は此方が氣になる。

「お、變に氣を持たせる言方をするなよ。何かあるのか?。」

「ほ、う、えね。曰くなんざ御座あません。若くつて、綺麗な方ですわね。何でも東京の方とか。よくこゝにいらつしやします。」

「ちえつ。東京か、東京つて言ふと女迄綺麗に見えちやふんだから厭になつちまふ。尋きもしない事余り喋るもんぢやないよ。筒拔だぜ。」

「いゝえ、大丈夫で御座んすわ。先刻お出かけになつたばかり。」

「だからと言つて話し込まれちや堪らない。」

お米さんは笑つて膳を捧げて立つた。抑々からこんな風ぢや思遣られる。のんびりしようと思へば聞き度くない事も耳に入る。仙人にでもならなくつちやと思ふ。併し、昨夜の女が隣の女ぢやないかといふ氣がする。こいつは少し身許調査をやる必要がある。今度お米さんが來たら宿帳でも見て喋らせようと思つたが晝はお兼どんで機會を逸した。以來、隣の氣配が妙に氣になる。併し風呂で不意を喰つたと同然、室でもそよとも音がせぬ。之ぢや一日中鼻もかめない、寝そべる事も出来ない。一体自分は此處に何しに來たんだらうと思ふ。何しにと問はれても困る。行き當りばつたり、その内心は「事もがな」であつたかも知れない。今考へると矢張り疾しい所がないでもない。山奥の温泉宿と言ふと何かしらロマンティックな闇を持つてゐる様な氣がする。結局その日も暮れて終つた。

夕飯に來たお米さんを掴まへて探りを入れて見る。「矢張り氣におなりで御座んすか」と笑ふ。「氣になる様に仕向けたのは誰だ。その責任上答へる義務がある。」と詰め寄ると「難しい事、」と一旦は顔を擧めて見せるが固より嫌な道ぢやなし、口より先に生れて來た様な女、得たりかしこしと

「今度の宿帳には世良淑子・廿才と書いて御座んすが、お越の度にお名前が變るんで御座んすよ。郵便は一度だつて参つたのを見た事が御座んせんしね。毎日只、ぶら／＼しておゐで、何うした御家庭の方だからつとも――、でも女子大とやらに行つておゐでとかおゐでたとか。」

「そんな事まで宿帳に載つてゐるのか。」

「まあ御冗談を、之は私共の地獄耳と申すもんで御座んすよ。」

「何處の女子大だい。」

「さあ、東京で御座んせう。」

と不思議さうに私の顔を見る。學校は悉く東京に在るんだと思つてゐる。だが私も實は女子大なるものが何處々々に在るんだか知らないんだから余り威張れたものではない。女大學と女子大學の區別迄はつきさうだけれど。

「美人かい。」

「ええ、そりやもう、氣味の悪い位。」

「冗談ぢやない。器量で脅されたんぢや引合はない。痘痕も髭て言ふから何か見落してゐる處はないか。」

とひどく肩を持つて自分の事を言はれた様に力む。

「眼鏡は？ 金縁かい、縁なし？」

「え？ めがね？ いーえ。」

と解せぬ、解せぬと首を振る。

「いやね。女子大つてからちよいと眼鏡をかけさせて見たのさ。何しも眼鏡がなくつちや感じが出ない。」

と私は少しがっかりした。

「ほー、それは貴方おめがね違ひと言ふもんで御座んす。それこそほら、下界で申す認識不足で。」

「こいつは參つた。お米さんにやられるとは思はなかつた。」

地上を三千尺も離れると人間界が下界と來るから凄まじい。自分の居る處は眞逆天界とは言ふまいが仙界位の事は言ふかも知れない。仙界に俗物が住んで居るのを不都合とは思はないのかしらん。

「先づ安心した。」

「何がで御座います？」

「美人と聞いてさ。」

「然うで御座んせう。」

とお米さんは獨合點をする。

「私共に向つても優しく隔なく言葉をおかけ下さんですが、何となく斯う、近寄りにくい處が御座んしてね。時々此方がどつくりする場合が御座んす。違つた世界の方とは存じて居りますがね。」

何時の間にか私は昨夜の女が其だと獨り決めに決めて居た。尤も私の美しいと知つてゐるのは足だけだつたけれどお米さんの言ふ通り顔の方も無論美人に違無いと考へた。お米さんも私もしいんとなつた一瞬、合の襖が狼狽にも似た微なことんといふ音、同時に少し慌て氣味の衣褶の音が聞き取れない位であつたけれど針の様に鋭く尖つた室の空氣と私の神經を搔き立てた。お米さんの話で大分隣の女主に馴染の出來た私の氣持は間髪を入れず立直つてゐた。

「誰方？ 出したらつしやう。」

應ずる如く合の襖はさらりと開く。

ヒロインは美人ぢやなくちや濟まぬ方

と高く鋭く笑に紛らして女主は悪びれた様子もなくすりつと火鉢に寄り添ふ。寝耳に水のお米さんは臍を抱へるなりきり舞の態で廊下に逃げる。私はせめてもと傍の座布團をくるり裏返して一應はすゝめる。

「御存知の様だから紹介は致しませんわ。四五日お友達になつて頂けません？」

「えゝ、話の相手位は」

「それで結構よ。」

眞向からの太刀打である。目を限る處等は何うして、大した舞臺度胸だ。

「宿張なんて嘘つばち、それだけよ。」

「お米さんの方は何うなります。」

「御勝手に。」

女主の横尻で裾前が崩れて例の足がそれでも羞らひがちにくねつてゐる。私は此の足に初めて舊知の人に出會つたかの如き懐しさを感じた。その足に「昨夜は何うも……」と挨拶して見度い様な氣さへする。

「何を見てゐらつしやる。」

と又もや私に恥をかゝせようとする。明らさまに言へば私の負である。にやりと一笑胡魔化すに限る。はつきりした顔立だが眞面に見ては損な顔だ。意識してかせずか私に見せた右のプロファイルがびつたり来る。

「この邊、よく御存知。」

「初めてですよ。」

「貴方の様な方は何日お居でになれるか疑問だけど、下界よりはいい處だわ。」
私は苦笑した。

「貴方御寝坊ね。明日から早く起して上げるわ。さうね、六時ぢや何うかしら。」

私は助からないと思つた。六時に起きた等と知つたら、下界の母は何て言ふだらう。「山ぢや時計が四時間も遅れるのかさ。」とでも言ふだらう。「氣壓の關係でね」位に答へておかうか。

○

ぶらりタオルを提げて入浴に立つ。戸を開けて一渡りぐるりと見渡す。あれ以來頃に臆病になつて斯うして見ないと承知出来ない。併し多くの場合は安心して可なりである。夕飯時の故か幸に閑寂である。蓋しこの湯が惜しい。録に汚れもせずに流れ出て終ふ。が、この湯が凹みを通つて下に流れ落ちる音は何時聞いてもさう、静かだ。紅葉の候はとづくに

過ぎたけれどもこのガラス越の其頃は嘸見事だらう。今でも谷を埋め盡す千年杉の梢にたゆたふ冬日の影は捨て難い風情には違ないが、私の知れる限りでは比叡山、それも根本中堂から坂本へ抜けようとする邊を琵琶湖の前に望んだ時、その杉の持つ美しさが殆ど夢にも似た感動を私の胸に焼付けたのを忘れ得ずにいるが今のこの見事さも地味乍ら其に劣るまじく思はれる。しゅん／＼皮膚に泌み通る暖さに陶然となれば唄の一つも口に出る。醫者は「入浴中は血壓の關係上、放歌高吟は慎んだがよろしい。」と忠告して呉れる。「衛生上の立場から」ださうだ。私自身は誰が何と言はうとし度い様に自然の情に任せるのが一番命が延ぶと信じてゐる。私なら「健康上の立場からですぞ」と斷定をつける。だから私は人情考に戻る。

へこら邊は山家故、紅葉のあるのに雪が降る。嘸寒かつたで、え、御座んせう。チ、チンチ、ンチ、チンチンチン。

口三味線の糸が切れて私は湯槽を出る。今迄氣がつかなくつたが私の室の火鉢には鐵瓶がかゝつてゐる。平凡な鐵瓶だが古代物らしく澁い茶表の蓋に銀と地色の蝴蝶が二匹――多分雌蝶雌蝶だらう――飛んでゐる。中を覗くと已に湯垢が吹いてゐる。通人はこの湯垢を頗る珍重するとやら、湯垢の吹いた鐵瓶で沸かした湯はホンに味がとか之ならでは、とか悅に入るそんじよそこいらの御隠居達垂涎の代物だらうが、今時こんなものが見られるのは、無智辛い下界では饑饉の聲に怯えて跡白浪と消える處、流石は田舎だと頷ける。ガスの無い有難さ、年代の垢がそのまま見られるのは嬉しい。之に興味を感じて數々の調度品に目を遣ると床の間の掛軸に目が止つた。見えなかつた譯ではないが悲しい哉、下の御轉車だけが目に入つて上の肝腎の文句は讀めさうにもないので諦めて終つたが、變つた軸だとは思つてゐた。ためつ、すがめつ横になり縦になり、骨は折つたが判讀は出來た。「梅は飛び櫻は枯るゝ世の中に、何とて松の情無かるらん。車引きか。」と呟くともなしに呟いた私はふと思ひ當つた。私の室は「松の間」と銘打つてある。例の隣の間は「梅の間」他の片隣は「櫻の間」だが今は客はない。正に櫻は枯れてゐる譯だ。然う言へば欄間から襖から調度の模様までこの室は松盡し、疊の縁

迄松模様だ。隣の間はきつと梅盡しに違ない。随分凝つた趣向だ。只の宿屋にしては上出来過ぎる。お米さんに尋いて見よう。「火鉢の火加減は何うで御座んす」とそつと隣に氣兼ねるお米さんに、

「この家は随分風流に出来てゐるが何か曰くでもあるのかい。」

「此家は本、御隠居さんが道楽半分に建てたんで御座んす。御隠居さんと云ふのが大の淨瑠璃狂、歌舞技狂で御座んしてね。木挽町や四つ橋の文樂座邊にもちよい／＼出掛ける位で御座んすから、此家を建てるにもひどく凝つたと言ふ譯で御座んせう。」

と隣に關係無しと見てか段と聲が高くなる。

「ぢや何かい、前の廊下は松の廊下とでも言ふのかい。」

「えゝ然うで御座んす。」

「こゝつは驚いた。又傷されちや堪らなう。」

「ほゝゝ精々憎まれぬ様になさるがよござんせう。」

お米さんは可笑しさを目に匂はして早々に切上げる。盡く床の間を眺める。あの御所車には時平は乗つてゐない。松土と梅土とは一体何を引合はうとするのかしらん。等思に耽つてゐると「お邪魔？」と聲は義理だけ、ほんのりした香が鼻を打つ。其方を向くと入交りに件の掛軸に彼女の視線が走る。私も再び目を遣る。

「妾の間が梅の間で貴方の方が松の間なんて口惜しいわ。ふゝゝ。」

と聊か氣まり悪げである。

「梅ちや不服ですか。」

「だつて松に引負けるなんて。それに梅は單純過ぎるわ、少しは深い處も欲しいわ。」

「仰せ御尤もですが、でもその尻を僕に持つて來る術はないでせう。」

「其で責任を逃れたお積り？呆れたわ。」

呆れたのは寧ろ此方である。此女は何う言ふ積りか知らないが私に向ふと高飛車に頭から抑へつけようと努力する。尤も最初は此方が拙い事になつて其以來感じなくともいゝ負け目を味はつて來てはゐるが、斯う迄意識的に出て來られると厄介だ。大人氣無い乍らも一應は拗ねても見度くなる。こんな飯事まじごと同様他愛のない憎まれ口の應酬で瞞される位なら此女も大したものではないとつい見くびらうと言ふものだ。此女は未だこんな時代に居るのかしらと改めて私は彼女の顔を見直した。といつて私が彼女より決して感情的に進歩してゐる事にはならないけれど。私の方が幾分狡いのかも知れない。月並な事を言ふまいと其許り努力して平凡を非凡に見せようとする様な女―清少納言と迄は行かないけれど―虚勢が痛々し過ぎて骨迄透いて見えさうな氣がする。同時に何時しか私もこの型に引込まれさうだと思つた。併しこの女は危い。足許を見た途端に擲はれる様な醜態は演じたくないから正体の掴める迄は滅多に腹は見せられない。

「此處が馬鹿に氣に入つたと見えますね。之で何度？自此處に入らつたのは」

「お米さんに聞いて御覽なさい。」

「余り苛めないで下さい。も少し素直になつて下さいませんか」

と少しづつ〜言つてみる。

「妾そんなにひねくれてゐるかしら、可愛想に、……。遠慮深いのねえ。」

「貴女の様には行きませんよ。」

「何故？厭だわ、そんな附合、妾もう何も残つてやしなくてよ。貴方の方こそ何うして素直に妾と融け合つて下さらないの、焦れつたいわ、悲しいわ。」

之では水掛論だと思つて私は口をつぐんだ。が最後の言葉に仄かな暗黙の讓歩を感じて微笑んだ。それだけ私は甘くなつてゐたのかも知れない。

「ね、之から合襖は開け放して置きませうよ。隔がある様で氣持が悪いわ。」

「貴女の方が構はなければ何うぞ。」

「一寸失禮」

と女は身を引いて襖の引手に手をかける。とんと体がきまつた處を見送る帯のお太鼓に、豫期せぬ御所車の金絲、銀絲がきらりと光る。床を伸べに來たお米さんが開けつびるげの襖にけんな目を向ける。言解が多過ぎると思つたけれど一應釋明する必要がある。

「氣になるついで」

「氣になるのは、そちらぢやなくつて」

と闕越しに一矢、お米さんは一寸抜の悪さうに赤くなる。

何う取らうと私は一切が面倒臭くなつて其以上の説明は馬鹿らしい氣がした。梅の間で電燈のスイッチを切る音が高く響いて壘が一條白々と牙え返る。お米さんも無言、私も無言。無意識に私の手がスタンドに伸びる。打つ交ひに竹格子を組んだ丸窓に身を寄せた私は離れようとしてふと壘の上に白い拳状のものを見出した。私は一瞬紙屑だと思つた。「斯んな處に紙屑が」と疑つて見る事を忘れて、ついと手を差伸べると紙屑は手の甲に躍る。しつかり握り締めた自己の拳に暫し魅せられた様に動かなかつた私は、白くぼつかり闇に咲いたその忘物を逃がさない様に斜に拳を上げて行くと私の拳は、はたと丸窓の破れに突き當つた。紙屑と見たは丸窓の破れを慕ふ月光に外ならない。

紙屑を斜に落す破れ月

業平ならねど正に情余りて言葉足らず。尤も紙屑ぢや句にならないかも知れないが、私では十七文字が三十一文字になつても満足に歌にはなるまい。

あゝは言つたものゝ流石に言葉通には干渉し兼ねたと見え、今朝覺めたのは八時を少し廻つてゐた。隣の手前思切りよく溫柔郷を見棄てゝ見たが女主人の影もない。多少お目出度く出来てゐる自分に遣場のない腹立たしさを覺えつゝ窓を開け放す。珍しく殊勝な心掛になつた序でに歩いて見る氣に成つた。お米さんに、

「此附近で散歩する様な處は？」

「さ、神池邊は何うで御座んせう。ほら、あの邊で御座んすよ」

とお米さんは左の手で杖を絞つて右手で下の方を指さす。宿の下駄を突つかけてぶく／＼ら松茸の香がしさうな赤松と赤土の世界を抜けると路は左へ櫛林に突當る。紅いぢけた朽葉あり、殘る病葉のこゝを玉の緒としがみつける。そして心細からぬ梢も幹も流石ちらほらと迄は落魄れず、落葉を踏めば「冬近しさくり／＼の音増せば」か「未だ秋か、ざくり／＼の音増せど」かそゞろ旅情は行きつ戻りつ、續くともなく神池に盡きる。木群を見棄てゝは余りに情がなさ過ぎる。今一步、木立透しの絶景かな、絶景かな、水は彌生の空宛ら、晒粘土の水際は深く削れて思はぬ岸の緩に、上に立つの危さは胸をつく思である。見遙かす空々、杉々、融ける邊は霞の中、息詰る様な靜寂の境地に自ら瞑すれば現とも思へぬさゝやかな水音が途絶え勝ちに耳に傳はる。音のみに焦立つて二步三步、寧ろ惹かれる様に踏み出した私はゆくりなくも女主の姿を目の下に見出してはつとなる。存在主張も不粹よと態と私は動かぬ。見れば彼女は掌に弄ぶ小石を眼前の水面に投ずる事に余念が無い。背後に寄添へば何思つてか彼女は例の足をぶらり水に浸しては力を罩めて何かを蹴上げる様にする。そして嘲にも似た忍笑を洩らしつゝ獨り興がつてゐるらしい。何うにも解せぬ氣持で將に前屈みに覗かうとした途端彼女はくるりと向き直つて恰も私の存在を豫期せるかの如きつと項を反らして、眞一文字に私の顔を見上げる。私は子供が悪戯を見つけられた時の様な場の悪さと後めたさを感じてどぎまぎした。

「御卑怯。」

と靜かな聲音である。頓に應へも出なす。

「知つてますわ、そんな眞似およしなさう。」

其處で突然押へかねた様に身一杯に笑ひ出すと斯う言ふ。

「妾何をしてたかお分り」

「さあ……」

私は一應頭をかしげて見せる。

「ほら」

と再び前の所作を繰返して見せる。私は「あつ」と腹の中で叫んだ。我乍ら不覺、水鏡とは。見映とてせぬ野郎面が石を喰つては潰れ、顎を蹴られては歪み、哀の限である。由ない悔恨の一時。

「ね、ふゝ、貴方のお顔お氣の毒だけどくしやく／＼にひしやげたり、ふくれたり、とても悲しさうだつたわ。」

私は相變らず頑強に押し黙つたまゝである。女にしては烈し過ぎる、否、殘酷と思はれる迄此女は私を踏附けにしなければ氣が濟まないのか。二度目に碎かれたのは顎だけか。打ちのめされた暗い氣持は一体誰に裏切られた結果か。誰に？ いや自分自身にはないか。彼女の勝誇つた悪戯つぽい目が次第に哀願に近い色に變る迄の息苦しい間。

「貴方駄目ね、……まるで感激を忘れて終つた見たいな方。」
とぶつゝり、肩を落して彼女は呟く。

「驚く中は樂みがある——か、貴女は樂みが多くて仕合せですか。」

「妾が藤尾だとも。」

鸚鵡返しに然う言つて彼女は懶い視線を遠くへ投げる。次の瞬間、抜ける様に白い緋を惜氣もなく水に颯らせつゝふいと氣が代つた様な語調で斯んな事を言ふ。

「久米の仙人でも落ちて來ないかしら。」

「落ちて上げませうか。」

「や、く、ぶ、そ、く。」と彼女

「ご、あ、い、さ、つ。」と私

「ブリミティブな引力の発見はニュートンより久米の仙人の方が案外先だったかも知れない。」

「あら、でも万願引力？」

と彼女はとぼける。

「フー、女願引力!!」

私達は聲を合はせて笑つた。

「今度は妾をお那美さんにする積り？」

と目に可笑涙を貯めて言ふ。

「何う致しまして、那古井の里はちと遠し。」

と芝居もどきで私は受ける。やをら彼女は土を拂つて促す様に身じまひをする。流にかゝる橋あれば戻り橋とは名付けた
し。

「此處では方言らしいものを耳にしなすけど。」

「御座んすとも。」とお米さんは「心外な」

とふ顔をする。

67 「だつて君は訛がないぢやないか。」

「それは、妾は地着いいた者ぢや御座んせん。流れ者で御座んすもの。」

「ほう、ぢや何かい、此邊迄矢張り住變が来るの。」

「ほう、貴方がたは地の者許りと思つてらつしやるんで御座んせう。いゝえ何うして、却つて「移り」でなくちや勤まらない——とま、然うしたもんで御座んすよ。妾？ふ、之でもお江戸の何とやらで御座んした。」

と肩をすくめる。

「ふーん、でも「郷に入りては」だ、此處のお國言葉でやつて呉れなくちや、と言ふもんさ。第一感じが出ない、そのね、「御座んす」てのを聞く度に下界へ引戻された様で妙な氣持になるのさ。」

「然うく、地の者と言へばほらお兼どん。」

「ふんく、然うだらうと思つてゐた。」

私は一先づ話を切上げた。

私は此處へ来て平常感じてゐた女性の三つの型を目の前に並べて見てゐる様な氣がする。第一は平々凡々、順調に年を重ねて朽ちて行く最もありふれた普通の女の型、——お米さんが夫だ。少女時代、青春時代、年増時代と一つ一つ、こつ／＼と忠實に歩んで一生を終へるといつた型。第二はお兼どん、——特に田舎に於ては屢々出會ふ型、此人の顔を見てゐると成程猿と人とが半分々々に住んで居さうと領ける——此型では生れると死ぬ迄老年時代一點張りである。何うしてもこの女に考へられる様な青春時代があつたとは思へぬ。満足に齒は生えぬ儘、従つて抜けたのではない——現在に至る、謂はゞ老婆宿命型とでも言つた女々である。お兼どんは其中で醜からぬ程度に尤なるもの。第三は梅の間の型である。人並な生き方を本能的に輕蔑し、常に高いもの美しいものを追つて倦まない。而も刺戟によつてのみ其が得られると信じてゐる女。此女のためには青春時代だけが存在する。見方に依つては過渡期の最も平凡な女でしかあり得ないかも知れない。斯んな女との戀愛は神經衰弱を意味する。或意味では不具である。

湯の氣の冷めぬ中にと床に入る。梅の間も靜かになる。深々と夜具に頸を埋めて默念としてゐると、「暫くお話になり

ません。」と此方の意志は半ば無視した調子で隣から聲がかゝつた。寝物語も一興と強ひて浮かぬ風に承知する。併し其だ
けで再び沈黙が冷靜に闇を支配して終ふ。少々焦れてゐると長い歎息を前奏に纏る様な重い口調で女主は語り出した。

「妾自分で自分を持って余しますの、抑へるなんて考へても厭だし妾には出来やしない。疏通場を求めれば衝突が起きる
し、一層氣でも狂つたらと自棄になつても見ますわ。尼さんに成る方もあるけどそんな卑怯な骸みたいなき方はした
かないの。あゝやつて生きて行ける事が不思議な位。」

「貴女の感情線は余りラフで不連続過ぎると思ひますね。百面相を御存知でせう。顔面筋肉の工夫が過ぎると終には何
れが自分の本當の顔だか分らなくなつちまふさうですが。」

「でも妾十五・六の頃はこんなに迄なかつたのよ。矢張り外の女達と同じ様に堪らなく自分の体が愛しい時があつて、
鏡の前でうつとり見入つたり、自分の体は永久に美しいものだ等自惚れたり、だから醜くなる事を極度に嫌つたわ、い
ゝえ、恐怖さへしましたわ。自分だけは、と望みもし恃んでもゐましたの。でも——あら御免なさい、こんな話。」

「鏡の中の自分にそつと接吻する氣持ですわね。」

「それだけに反動が激しかつたのね、ふゝゝ。」

「何う解決をつけました？」

「何でもないわ、妾も矢つ張り『生まれたもの』だと氣がついただけ。お腹からよ。」

お腹からと言ふ様な言葉を彼女は何の氣兼ねもなくすら／＼言つてのける。

「だから美しいも汚いもないと言ふ譯ですか。」

「その方は今は下らない問題になつたけど、も一つの方は一駄目。」

と絶望的に喘ぐ。

「蘆花の様に『女は士だ』て言つたら貴女も嘔ひますか。」

「女は土?」

「え、つまり……一切を包容し、忍受し、生育する土と女性との間には深い意味の連絡——まあ、一口に言へば土と女との連絡——もつと端的に言つちまへば農と女の連絡で事になるんですがね。然うしたものがあつてんです。農は弱味は女の弱味、女の強味は農の強味、蹂躪される様で實は搭載し、常に負ける様で永久に勝つて行く土の偉大性を貴女方は具へてゐる、とまあ斯うなんです。分り切つたと云へば分り切つた事でせうが。」

私は豫期した如く彼女の無云の中に冷やかな憎悪と反撥——同時に屈辱感と迄なるだらうが——を感じた。

「然う、確かに一時代前だ。ですが我々がこの言葉に何かしら舊弊とのみ言ひ切れないもの、共鳴させられるものを感じるのは經驗と批判の貧弱からだけぢやない。又日本の封建社會道德の産んだ念佛的な型づくめのイデオロギーとして無視し去る程にもなつてゐないんぢやないかと思ひますね。」

「妾達に動物的な生き方を強ひる欲求を持ち出す事によつて妾達の知性を損つておき乍ら、妾達が聰明でないと云つて歎き、本や學校に依つて妾達を進歩させようとなさるの。そんな御都合主義は御免だわ。」

「情慾と言ふもが總て消滅して終つたらそれと共に人は數も消滅せるかも知れない。」

「或人達が只豚である事を止め度いと考へてゐると云ふだけの理由から人類が斷絶して終ふとでもおつしやるの。」

「貴女は美しいからそんな事云へる。」

彼女は突然私の言葉を遮つて激しく言放つ。

「そんな人なの。妾貴方を輕蔑するわ。」

「輕蔑位で清算出来るなら結構です。早い話がね、大抵は背でも男より女が抵い。男性と女性と許り目に入る人間世界で之が同じ高さになつたらそれこそ人生はもつと單調で退屈なものになつて終ふだらうと思んですがね高さが違つてこそ見られるんでせう。建物の高さも何も皆同じになつ終ふ。定規とコンパスの世界に人間は生きて行けるとは思ひませ

る様だ」。

「そんな事で済ませる氣持ちやないけど。御存知？あのバス迄だつて一昔も前は馬車の鈴の音が往來してたて言ふわ。ランプも馬車も古いものはどんく／＼棄てゝ終ふ人達の癖に」。

「後から惜しくなつて矢張り棄てるんぢやなかつたと得手勝手と言へば得手勝手だけど。それと同じ、一旦は新しいものに取りついて見へても古いものに眞實性を發見して驚くと今度は呆れる程頑固にその味方になるんです。でももう其に拘泥するのは廢ませう」。

バスの溜のトタン屋根が見え出した。近づくに従つての彼女の益々力のない足取りを私はひどく危ぶんだ。彼女は乗つたと言ふよりも乗せられた形だつた。驛に着いて改札は始つたが彼女は動かかうともしない。私はこんなに迄自分の意志を忘れた彼女を此の時初めて見た。

「歸るんでせう、もう入らなくつちや。」

と揺ぶつた肩に私は思はぬ反抗の籠つてゐるのを悟つて何を言つても駄目だと諦めてフオームの人々を見遣つた。その人々も間もなく居なくなつて終つた。

「明日歸へります。」

と脱ぎ棄てる様に彼女は云つた。此の時私も明日發たうと漸く決心がついた。私達は黙々と引返し黙々と翌朝を迎へた。私の列車の方が先だつた。窓から私は手を差出して見たが彼女は揺らうとしなかつた。そして「貴方だから」と辯解した。又「貴方はいゝ方だけど意地悪なのが不可ない」と寂しく微笑んでさう言つた。車輪が一つ廻つて因果が切れ世界が二つになるのは明治の御代も昭和の御代も變りはない。

「必つと歸へるんですよ。」

と後に叫び乍ら私はさう迄意地を捨てぬ女が可愛想になつた。